

第 1813 回（3 月 16 日）
体制転換前後のハンガリー農業構造改革
——農場組織の変貌を
中心テーマとして——

（筑波大学）坪 井 伸 広

1996 年 3 月～97 年 9 月、科学技術振興事業団の研究協力者海外派遣事業にて、ハンガリー科学アカデミー経済研究所に客員研究員として派遣され、その間に実施した同国の大規模農場組織（1,700～9,500ha）の調査結果をもとに報告する。私はハンガリーあるいは東欧を研究領域とするものではなく、大規模農場組織に関心を持つ、日本農業研究者の目で観察した限りの報告であることをはじめにお断りしておく。

1. 研究の目的・内容・背景

調査の目的・内容は、事業構成・労働編成・トップマネジメント・従事者の労働生活など大規模農場組織の実態を明らかにすることである。研究の背景は、1992 年に日本でも本格的な組織農業経営体の育成が政策課題として取り上げられたこと、イデオロギー対立が解消した今こそ家族経営と大規模組織経営との比較研究が可能と考えたことにある。

ハンガリーの農場組織を選んだのは、ハンガリーが社会主義圏では数少ない農業の優等生といわれてきたこと、体制転換後に家族経営の育成が課題とされながら調査時点でなお多くの大規模農場が健在であったこと、2,000ha 規模以上の農場を数多く擁する国が他にないことなどの理由からである。

2. 旧体制下のハンガリー農業改革と大規模農場

体制転換後 10 年を経過した 2000 年時点でも、ハンガリーには多くの大規模農場組織が健在である。古い農場が衣替えして生き残っているだけではなく、まったく新たに誕生する大規模農場もある。こうしたことは、体制転換前からハンガリーが市場経済を農業分野

にも広く導入し、他の社会主義諸国の農場とは一味違う性格を獲得してきた、その成果と思われる。

62 年に農業の集団化を完了したハンガリーは、66～84 年に長期にわたる高度農業成長を経験した。労働力と農地の効率利用のため 70 年には農地貸借が奨励され、76 年には借地期間が 50 年以内に延長された。80 年代初期には私的部門が農業生産の半ば以上を占めていた。さらに、88 年に社会主義労働者党は市場経済への全面転換を決定し、89 年に政府は企業転換法、協同組合法改正、土地法改正などを整備した。その矢先に体制が転換したのである。市場経済への移行に旧体制下にあっても早くから手がけてきたことを私は重視したい。

体制転換直前に農業生産者協同組合農場は約 1,259 農場、国営農場が 128 農場あった。80 年代末の協同組合農場の平均像を紹介しておく、耕地面積約 4,000ha、従事者数約 390 人、穀作・油糧種子・畜産を営んでいた。事業種類に制限はなく、農業以外に農産加工、その他非農業部門を兼営する組合が少なかった。組合の従事者は自留地を経営し、組合はそれを垂直統合した。

国営農場の実態を明らかにできなかったが、平均規模は協同組合農場の倍以上あり、事業も多角化し、なかには軍需部品の生産をやっていた農場もあった。それでも、経済改革が行われてきた成果として、生産および運営効率を高めるために事業部制を採用し、従事者の賃金も事業部別収益を反映する仕組みなどが採用されていたようである。

3. 1990 年代後半の大規模農場

97 年現在、ハンガリーには、「新組合農場」（旧農業生産者協同組合農場の法的継承組合農場）、「新国営農場」（旧国営農場を継承した政府所有株式会社農場）、「新生農場」（私営で法的形態は多様）という性格の異なる大規模農場がある。この新生農場を私

は、「新生農場Ⅰ」（旧組合・旧国営農場の従事者、施設、土地をおおむね継承した新しい農場）、「新生農場Ⅱ」（旧組合農場や旧国営農場の系譜関係のない農場）の二つに分ける。

新組合農場は、組合員を雇用する義務を持たず、もはや生産者協同組合ではない。97年に2,000～2,500農場あるといわれるが、全体像は分からない。農業経済研究所の調査（95年104事例調査）によればその平均像は次のとおり。経営耕地面積2,300ha（全借地）、従事者197人、穀作・油糧種子・畜産の経営、作業・経営の受託、大中家畜の飼料の大半を自給している。多くは非農業部門を切り離した。

新国営農場は平均像すら分からないが、私の調査3事例を紹介しよう。経営耕地面積3,500～9,500ha（半分近くが国有地、残りは借地）、従事者数200～1,000人、穀作（販売用種子生産含）・畜産を営んでいる。3事例とも、かつての農外部門をいまは持たない。

なお、農業経済研究所の調査によれば、1997年に300ha以上の生産的土地（池、林地などを含む）を経営する農場は全国で1,675農場ある（調査に回答した組合のみ）。

また、同時点の「新国営農場」数は28である。

4. 考察

東欧に関心を持たれる皆さんへの報告なので、私の研究目的にかかわりなく、以下の考察も日本農業とは無縁の内容に限定する。私にとっては専門外の領域であり、的を外れていることもあることをお含み願う。

さきに大規模農場を新組合・新国営・新生Ⅰ・新生Ⅱの4型に分けた。4類型には図のような特徴がみられる。

ようするに、旧大規模農場組織の継承度合いが大きいほど、旧組織の体質をより強く残しているのである。新組合と新国営との間に、図の4項目についてどれほどの性格差があるか明らかにできなかった。

今後、家族経営（私が訪問した経営の一つは穀作畜産複合、親子3人と常雇1人で300ha）が台頭してくること、対外競争が激しくなることなどを考えるとき、新組合農場と新国営農場は今後その組織の再編が迫られることになるものと想定される。また、新生農場Ⅱの動静も含め、ハンガリーの大規模農場と家族農場との競合は農業経済・農業経営研究の研究素材として興味が尽きない。

	新組合／新国営	新生Ⅰ	新生Ⅱ	
過剰	← 雇用水準 →			柔軟な雇用調整
専門化	← 職能水準 →			多職能化
軽い	← 労働負荷水準 →			重い
低い	← 賃金水準 →			高い

図 ハンガリー大規模農場の類型とその特徴

- 注. 新組合農場：旧農業生産協同組合の法的継承農場
 新国営農場：旧国営農場を継承した政府所有株式会社農場
 新生農場Ⅰ：旧大規模農場の人材、施設、土地を基盤にする農場
 新生農場Ⅱ：旧大規模農場と組織的なつながりのない農場
 雇用水準では、新生Ⅱより新生Ⅰが、新生Ⅰより新組合／新国営が過剰傾向にある。